

「自分が好き、仲間・学校が好き、地域が好きな子供」を育てるカリキュラムマネジメントに関する研究

大山 和則* 磯部 征尊** 倉本 哲男***

*知立市立八ツ田小学校 **愛知教育大学技術教育講座 ***愛知教育大学教職実践講座

Study for Curriculum Management to Educate

"Children Likes Themselves, Friends, School and Community"

Kazunori Ohyama*, Masataka Isobe**, Tetsuo Kuramoto***

*Yatsuda Elementary School in Chiryu City

**Department of Technology Education, Aichi University of Education

***Department of Practitioners in Education, Aichi University of Education

キーワード：カリキュラムマネジメント、学級力向上プロジェクト、サービス・ラーニング

Keywords: Curriculum Management, Project for Promoting Classroom Competencies, Service-Learning

要約

本研究は、「自分が好き、仲間・学校が好き、地域が好きな子供」を育てるために、カリキュラムマネジメント（学級づくりや授業づくりを通じた学校づくり）を充実させるものである。

学級づくりに関しては、子供たちが主体的・対話的に「子供たちの子供たちによる子供たちの学級」をつくる学級力向上プロジェクトに取り組む。そして、その手法を生かして、学校力向上へとつなげる。

授業づくりに関しては、他人事（3人称）が仲間や教師、地域の人（2人称）との対話を通して、自分事（1人称）になる「2コブラクダの授業」を展開する。その際、授業実践を積み重ねる過程で、教員同士の協働により、学校理論としての「あたたかい授業」を構築する。

地域との協働に関しては、総合的な学習の時間の名称を「ひびきあい」として、年間指導計画を見直し、サービス・ラーニングを導入することで、地域との相互便益を図る。

I. はじめに

2016年1月、「次世代の学校・地域」創生プランが策定された。学校にかかる観点から、「社会に開かれた教育課程」の実現や、「地域とともにある学校」への転換を目指した取組が進められている。2017年6月には、馳プランを実質化させていく上でも必要不可欠な取組をまとめた教育再生実行会議第10次提言「自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上」が出された。そこでは、「日本の子供たちの自己肯定感は、諸外国と比べて低く、自分に対して自信がないままでは、必要な資質・能力を十分に育めたことにはならない」と指摘された。

本研究では、学校教育活動を、「カリキュラムマネジメント」の視点で整理し、児童の成長（自分、仲間・学校、地域が好きな子供の育成）、教師の資質向上（学級経営、学習指導）、学校と地域との協働（相互便益）をめざした。そして、本研究は、他校への転用が可能であり、研究価値があると考えた（図1）。

大山ら^①は、学級力向上、2コブラクダの授業づくり、サービス・ラーニング、それぞれの成果については報告した。しかし、それぞれの関係を整理して、学級づくりや授業づくりを通じた学校づくりとして、一つの構想図としてまとめるまでには至らなかった。また、量的な検証についても不十分であった。そこで、残された課題を解決するために、研究を継続することとした。

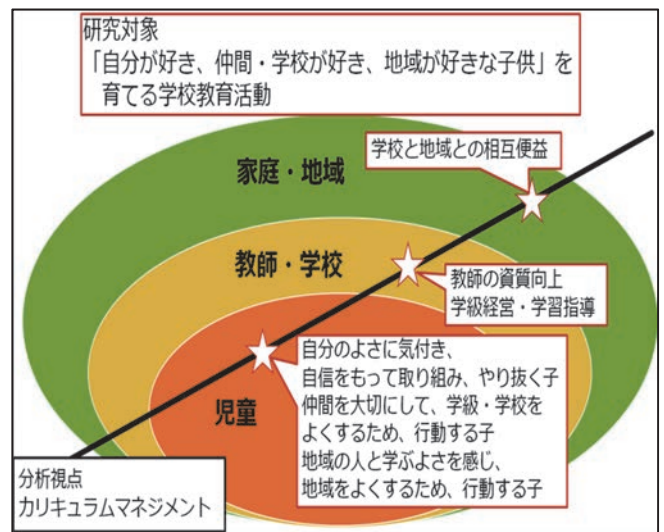


図1 研究の全体構成

II. 先行研究・事例研究の総括

1. カリキュラムマネジメント

倉本は、カリキュラムマネジメントについて、「学校経営の中心であるカリキュラムをいかに開発して、経営していくのか、そのカリキュラムの開発・経営がどのような学校改善効果をもち、子供たちにどのような学習効果をもたらすのかを命題に、教育経営学と教育方法学が相互補完的に重なる『融合的領域』を研究対象とする (p.14)」^②とまとめている。また、『「カリキュラムを創り、動かしていく」組織的なPDCAの営みが、どのように児童・生徒に教育効果をもたらすのか、

教師の資質・向上に貢献するのか、学校と保護者・地域とのつながりを深めていくのか等について論じるもの (p.14) ②と述べている。

2. 自尊感情

東京都教職員研修センター³⁾は、自尊感情の三つの要素を「自己評価・自己受容 (自分をかけがえのない存在と思えること)」「関係の中での自己 (人の力になると思えること)」「自己主張・自己決定 (自分を表現でき、自分で決められること)」としている。また、学習内容を習得させたり、指導方法を工夫したりすることが児童の自尊感情を高めることにつながる、と述べている。

栃木県総合教育センター⁴⁾は、『自己有用感』とは、他者や集団との関係の中で、自分の存在を価値あるものとして受け止める感覚 (p.6) と述べ、「貢献 (他者や集団に対して、自分が役に立つ行動をしているという状況)」「承認 (他者や集団から、自分の行動や存在が認められているという状況)」「存在感 (他者や集団の中で、自分は価値のある存在であるという実感)」から成り立つと説明している。

3. 学級力向上プロジェクト

田中⁵⁾は、学級の子供たちが「笑顔と拍手があふれる、明日からも来たくなる明るい学級」を協力して創り上げていく協同的な学習として、「学級力向上プロジェクト」を考案している。具体的には、目標達成力及び、対話創造力、協調維持力、安心実現力、規律遵守力からなる学級力を高めるため、「①学級力アンケートによる学級力の自己評価」「②学級力レーダーチャートを基にして話し合うスマイル・タイム」「③学級力向上のために子供たちが主体的に取り組むスマイル・アクション」という三つの活動を、R-PDCA サイクルに沿って実践する協同的な問題解決学習を提唱している。

4. サービス・ラーニング

倉本⁶⁾は、「主としてアメリカで発達したサービス・ラーニング (Service-Learning) とは、社会貢献力 (市民性) とセルフエスティームの向上を中心目標とする統合カリキュラム論、及び、授業論 (p.15)」と指摘する。サービス・ラーニングとは、生徒が主体的に参加するサービス経験を統合化し、その学習経験を発展させていく教育方法・教育課程のことである。その経験は、地域社会の必要性に適合するものであり、学校と地域社会を関連させ、生徒たちの体験を学的カリキュラムの中に統合していくものでもある。サービス・ラーニングについて、生徒たちが学校での学習経験を活用しながら地域社会に貢献するサービス体験を通して、主体的な学習経験をすることであり、地域社会の一員としての自覚と責任も学ぶものであると主張する。

Ⅲ. 勤務校分析

1. 学校評価より

学校評価 (2017.12) を生かした CAPD のマネジメン

トサイクルにより、職員間で課題の共有化を図ろうとした。教員の 21 名 (80.8%) が「児童は、自分のことが好きだと感じている」と「思う」「やや思う」と肯定的に回答したが、児童自身が肯定的な回答をした割合は、全校平均 73.2% で、教員が実感しているほど、割合が大きくなかった。また、5 年生 62.9%、6 年生 55.6% と高学年になるにつれ、肯定的回答の割合が小さくなった。「自分が好き」だという気持ち、「自尊感情」を高める課題が見えた。

2. 先行研究をふまえた質問紙調査より

東京都や栃木県の調査、田中の学級力アンケート、幸田町立中央小学校の Community School に関するアンケートを基に、「ふだん思っていること」の質問紙を作成して、勤務校の 3～6 年生の児童 288 名に調査を行った (2018.04)。その結果を spss で因子分析したところ、7 因子が抽出された (表 1)。そして、図式化した (図 2)。

表 1 因子分析の結果

因子	I	II	III	IV	V	VI	VII
I 自尊感情		.456	.440	.432	.277	.389	.377
II 支え合う学級			.481	.458	.477	.475	.389
III 学級・地域が好き				.466	.338	.290	.333
IV 地域学習					.172	.333	.317
V きまりを守る学級						.405	.147
VI 話を聞く							.377
VII つなげる発言							

因子抽出法: 主因子法
回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

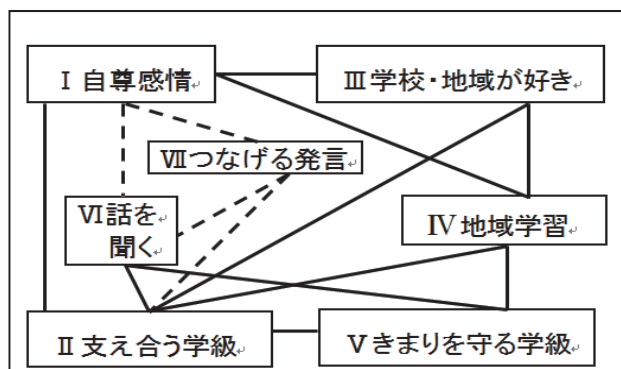


図 2 因子相関行列の構造化

「II 支え合う学級」「V きまりを守る学級」が「IV 地域学習」「VI 話を聞く」「VII つなげる発言」といった授業を支え、「I 自尊感情」「III 学校・地域が好き」へとつながると捉えた。そこで、「学校の教育活動全体において、『学級力向上』を基盤とした『あたたかい授業』を行えば、自分が好き、仲間・学校が好き、地域が好きな子供が育つであろう」という研究仮説を立てた。

主たる取り組みは、3 点ある。1 点目は、学級力向

上プロジェクトにより、支持的風土のある学級作りを目指す子供像に迫ろうとした点である。全校で取り組むことで、全教職員が同じ土俵で学級経営について語り合い、資質向上につなげることを考えた。

2点目は、学級力向上で築いた安心して発言できる学級のよさを授業に生かそうとした点である。児童同士の認め合い、教師や地域の人の称賛による「あたたかい授業」を目指し、児童が「自分の意見が役立った」「認められた」という気持ちを味わうことで、目指す

子供像に迫ろうと考えた。また、授業実践を積み重ねる過程で、教員同士の協働により、学校理論としての「あたたかい授業」を構築することで、教師の資質向上につなげようと考えた。

3点目は、Service-Learning の導入や年間指導計画の見直しにより、学校と地域とが協働的に教育活動を進め、相互便益を図りながら、地域への愛着をもち、地域のために行動する子供を育てたいと考えた。本研究の構想図を示した(図3)。

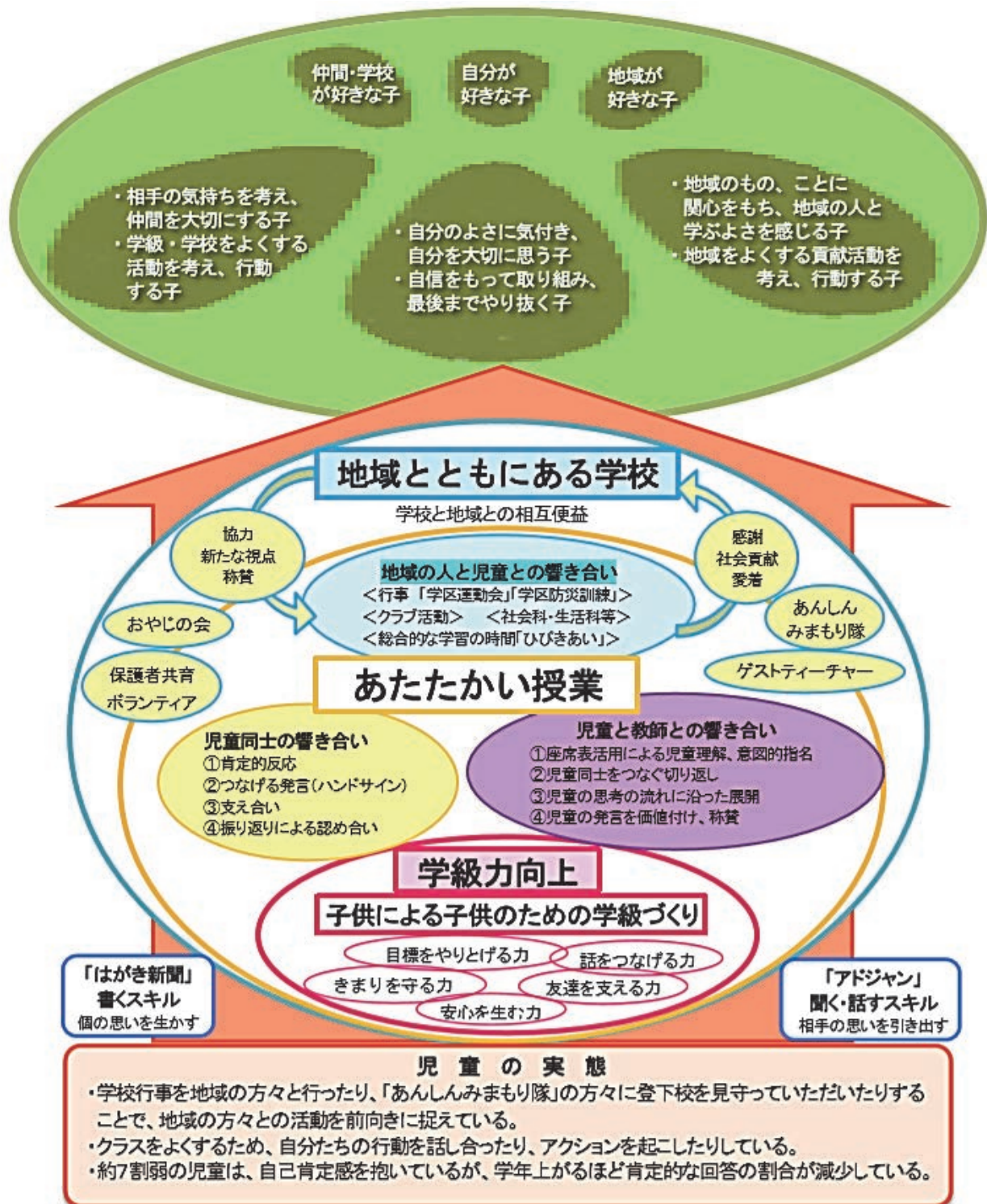


図3 研究構想図

IV. 実践の概要

1. 学級力向上プロジェクト

勤務校では、調査、計画、実行、評価、改善のR P D C Aサイクルをまわすことで、学級力を高めようとした(図4)。

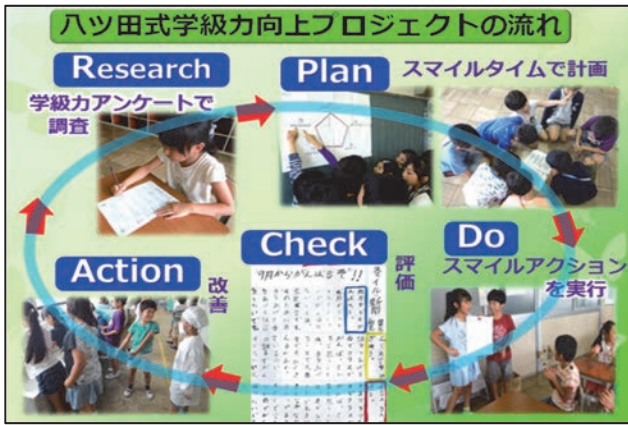


図4 学級力向上プロジェクトの流れ

スマイルタイムは、スマイルタイム週間を設定して行い、合わせて、教職員同士もスマイルミーティングをして、現状やアイデアを情報交換した(写真1)。

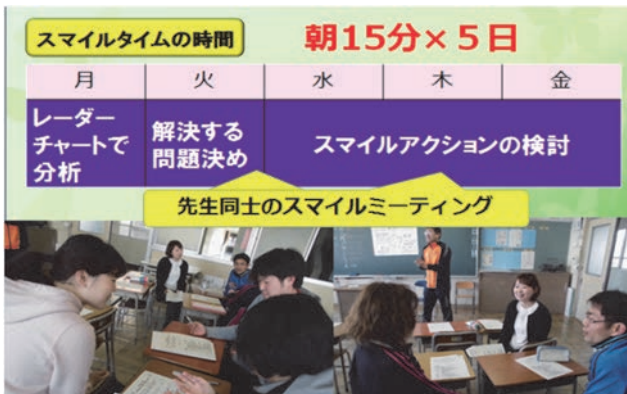


写真1 スマイルタイム週間

全校で実施したスマイルアクションをスマイルブックにまとめ、各学級に置くことで、スマイルアクションが思いつかないとき、子供たちが参考にした(写真2)。

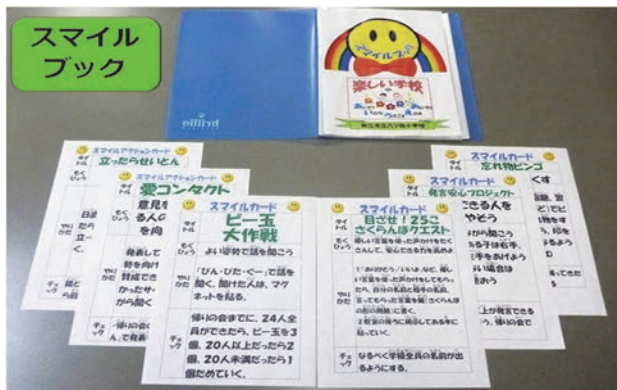


写真2 スマイルブック

筆者の担任学級では、「きまりを守る力」を高めるため、2019年4月は、うるさくなったら「静かにしよう」と仲間に伝言する活動に取り組んだが、注意し合う声や、合図の音がうるさく、うまくいかなかった。そこで、6月から活動を改善して、気付いた子が4本指を出して知らせることにした。

学校全体として、2019年4月までの取り組みでは「自分からあいさつする」「廊下を静かに歩く」など、生活の中で学級力を高めるものが主流だったが、6月からは、授業を通した学級力向上を職員間で共通理解した。

筆者の担任学級では、2019年4月から、帰りの会で、よさを認め合ってきたが、6月のスマイルタイムでは、「授業で友達同士助け合っているのに、決まった子だけしか名前を言われない」「授業のことで、よさを発表してもらえる子を増やしたい」という意見が出され、座席の2列(8~10人)のよさを見つける活動に取り組むことにした。活動の振り返りには、「みんながうれしい気持ちに」「授業でのことも言えるようになってきた」という満足感を味わった姿、「もう少し静かにしよう」と新たな課題を意識した姿が表れていた(写真3)。

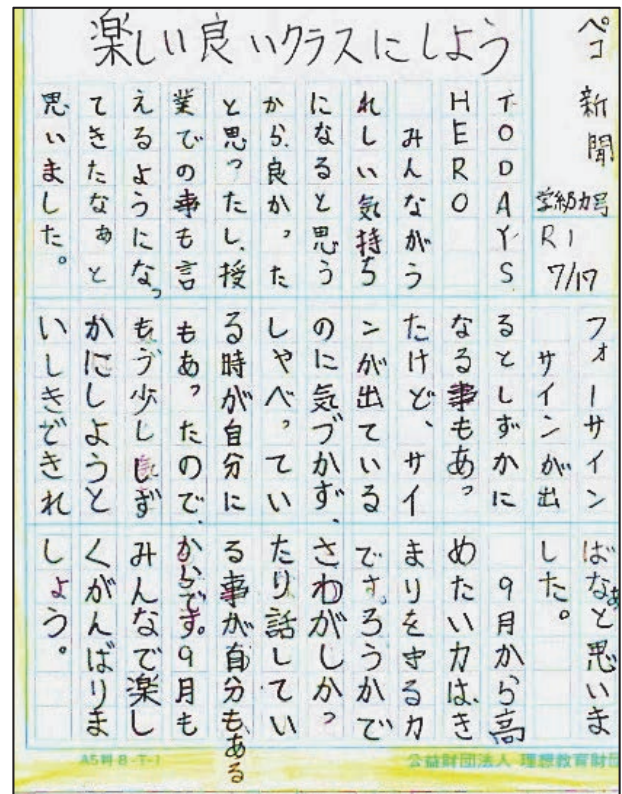


写真3 スマイルアクションの振り返り

2. 「あたたかい授業」づくり

各学級担任が1時間ずつ研究授業を公開し合い、実践を積み重ね、教員同士の協働により、学校理論としての「あたたかい授業」を構築した。勤務校の考える「あたたかい授業」とは、子供たち同士が肯定的に反応したり、仲間の考えを生かした発言をしたり、互い

に支え合いや認め合いをしたりというように、「児童同士の響き合い」のある授業である。また、教師が子供を理解した上で、子供の思考の継続をねらった授業を展開して、発言に対する価値付けや称賛をする「教師と児童との響き合い」のある授業である。さらに、地域の方から教わったり、地域の方を喜ばせたりというように「地域の人と児童との響き合い」のある授業である。以下に3つの響き合いのパターンを示した(表2)。

表2 学校理論の構築「あたたかい授業」

<児童同士の響き合い> ①肯定的な反応 ②つなげる発言 ハンドサイン 座席表活用 ③ペアトーク グループ活動 ④認め合い
<教師と児童との響き合い> ①座席表活用による児童理解、意図的指名 ②児童同士をつなぐ切り返し ③児童の思考の流れに沿った展開 ④児童の活動を価値付け、称賛
<地域の人と児童との響き合い> ①地域の方から ・専門的なことを教わり、活動補助、新たな視点の提供をしてもらう。 ・頑張りを認め、称賛してもらう。 ②地域へ ・学んだことを発信、感謝を伝える。 ・地域のためにできることを考え、社会参画、地域貢献する。

2019年10月に公開された研究発表会で、参観者から寄せられた感想を示した(表3)。

表3 研究発表会における参観者の感想

○聞く力が、どの授業においても育っている様子がうかがえ、友達が聞いてくれる、協力してくれる、助けてくれるという安心感が子供の発言の自信につながっていると感じました。 ○仲間の発言を肯定し、反応しながら、自分の意見につなげていく姿は、ほほえましかったです。一生懸命、取り組んでいる子供一人一人がすてきなあとと思って見ていました。 ○聴く力、共感が定着していることを感じました。どんな意見でも受け止めてもらえる安心感があり、発言が苦手な子もうなずきやハンドサインなどで参加できていました。先生がフォローと板書で授業を支え、話し合いを主導しているのは子供たち自身であるところがよかったです。
--

3. サービス・ラーニング

5年生の総合的な学習の時間「ひびきあい」では、地域の方に防犯に対する意識を高めてもらいたいと考え、防犯新聞としてまとめたものを各区長さんにお願

いして、学区内の公園や各公民館の掲示板で紹介した。そして、地域の方からは、「町内の皆さんに意識付けができて、とてもうれしい」「とてもいいことだから、今後も地域のためにぜひ活動を行ってください」というお礼や励ましの言葉をもらった(写真4)。

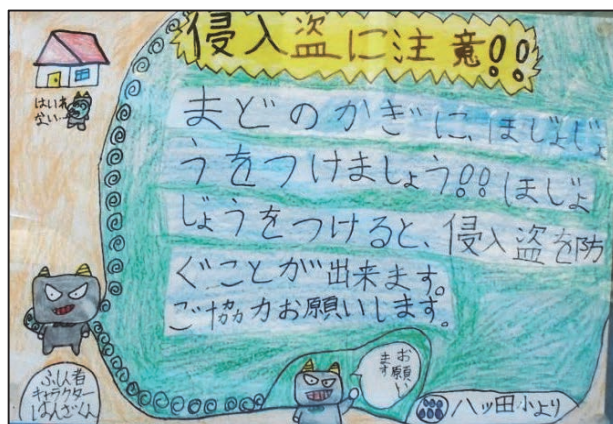


写真4 防犯新聞

また、防犯少年団として、子供たちが学校近くのスーパーへ来た方に防犯のちらしを配布した。子供たちの活動が学校と地域との相互便益となり、子供たちの地域へ働きかけようとする心情が高まった(表4)。

表4 防犯少年団の振り返り

<p>やって良かった防犯少年団</p> パトカーに乗って呼びかけをして、緊張したけれど、ゆっくり話すことを心がけました。スーパーで防犯の呼びかけをやったときに「ありがとう」と言ってくれる人がいて、うれしくなりました。今後は、自分自身が気をつけながら、周りの人にも声をかけようと思います。
--

また、6年生の総合的な学習の時間「ひびきあい」では、学校近くの福祉施設を訪問して、高齢者と交流活動を行った。子供たちの活動が高齢者にとっての喜びとなり、高齢者からの励ましが児童の心に響いた姿が読み取れた(表5)。

表5 高齢者との交流活動の振り返り

<p>最後の交流会はとても楽しかった</p> 遊びをしたら、おばあさんがとても喜んで笑顔を見せてくれたことが心に残りました。お話好きで元気な方で、「中学生になっても頑張ってるね」「どんなことよりも健康が一番」と励ましてもらいました。中学になってもいろいろなボランティアに参加したいです。
--

V. 考察

1. 学級力向上プロジェクト

写真5は、6年生児童の新聞投稿である。周りの友達との関わり合いに喜びを感じ、担任の心遣いに感謝し、学級がかげがえのないものとなり、満足感にあふれている様子が読み取れる。人と人とを結び、人の心がより豊かになっている。

回答が微増したことは、本研究の成果といえ、自分が好きな子供の育成につながったといえる。

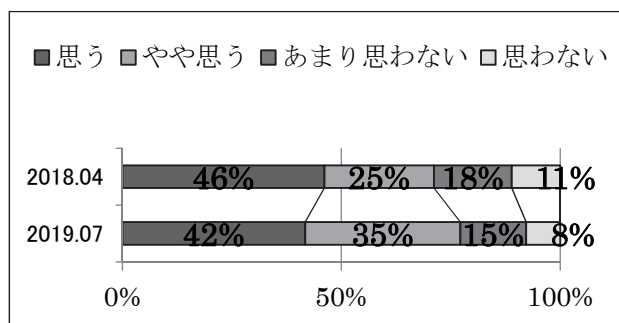


図7 「自分のことが好きですか」への回答

VI. まとめ（今後の計画）

本稿では、教員同士の協働、学校と家庭や地域との協働を図りながら、児童自身の成長や教員の資質向上へとつながるカリキュラムマネジメントの充実について、実践と検討を行った。

今後は、学級力向上プロジェクトについて、子供たちの考えを生かして、高めたい学級力に対する生活面や学習面でのスマイルアクションを改善する。そして、学校全体の財産としてのスマイルブックを充実させる。

「あたたかい授業」づくりにおいては、座席表の活用方法、ペアやグループ活動後の学級全体での話し合い活動、家庭学習や次時へとつなぐ振り返りなど、さらに研究を深める。

サービス・ラーニングについては、現在、実践中の単元について、まとめ、学校と地域との協働を今後も目指す。

引用文献

- 1) 大山和則・磯部征尊・倉本哲男『自分が好き、仲間・学校が好き、地域が好きな児童を育てるカリキュラムマネジメントに関する研究－「学級力向上プロジェクト」「2コブラクダの授業づくり」「サービス・ラーニング」の視点から－』愛知教育大学教職キャリアセンター紀要、2019、4、pp. 145-152
- 2) 倉本哲男『学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」』学校運営、2017年8月号 pp. 14-17
- 3) 東京都教職員研修センター紀要 第11号 自尊心や自己肯定感に関する研究（第4年次）2012
- 4) 栃木県総合教育センター『高めよう！自己有用感～栃木の子どもの現状と指導の在り方～』2013
- 5) 田中博之『学級力向上プロジェクト 実践事例集2 小・中・高校編』金子書房、2014

参考文献

- ・倉本哲男『Lesson Study and Curriculum Management in Japan』ふくろう出版、2014
- ・倉本哲男『アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究』ふくろう出版、2008

- ・倉本哲男『開発的生徒指導論と学校マネジメント』ふくろう出版、2007
- ・田中博之・磯部征尊・伊藤大輔『マンガで学ぼう！アクティブ・ラーニングの学級づくり クラスが変わる学級力向上プロジェクト』金子書房、2017
- ・池田和博『家庭・地域との連携システムの構築と児童の学びに関する研究 ～コミュニティ・スクール構想とサービス・ラーニングの視点から～』愛知教育大学教育実践研究科修了報告論集、2015、6、pp. 421-430